

## ITSA 2016 参加報告

立教大学大学院現代心理学研究科 宮川 えりか

### <会議の概要>

2016年8月17日から19日まで、イギリス（グリニッジ）で開催されたITSA 2016（6th International Tourism Studies Association Biennial Conference）に参加した。ITSAは、世界の観光・ホスピタリティ研究の発展を目的に、隔年開催されている国際会議である。本学会がヨーロッパで開催されるのは初めてであった。本年度の学会の主テーマは、「現代都市の観光」であり、都市観光、中国における観光市場、クルーズ観光、世界遺産など多岐にわたるサブテーマが設けられていた。

開催地となったグリニッジは、ロンドン南東部のテムズ川沿いにある港町である。グリニッジ標準時の基準となる都市として、グリニッジ天文台をはじめ、多くの歴史的建築物がある美しい町並みは世界遺産にも登録されている。旧王立海軍学校などイギリスが世界の海を支配していた歴史を知ることができる観光名所も多数存在する。

今年度の会場は、グリニッジ大学のstockwell streetという会館であった。大会初日から基調講演や口頭発表がはじまり、3日間の日程で、計113件の口頭発表が行われた。

### <研究発表>

筆者は、最終日に“The Effects of Nostalgic Scenes and Autobiographical Memories on Tourist Destinations”という題目で口頭発表を行った。原風景と自伝的記憶がどのように観光地選好に影響を与えるかを検討するために、質問紙調査を行い、共分散構造分析を用いて分析を行ったものであった。因子分



写真1 学会のポスター

析の結果、原風景は都市風景、田舎風景の環境要因と、温暖風景、寒暖風景の気候要因の4因子構造であることが分かった。また、観光地選好は、都市、田舎、知的探求、リゾート地の4因子構造が見られた。共分散構造分析の結果、原風景および自伝的記憶のどちらも観光地選好に影響を与えていることが分かった。都市的原風景を持っている人は、リゾート地などのリラックスできる場所を最も好み、田舎的原風景を持つ人は、山などの

冒険的な場所を好むという結果であった。発表を見に来てくださった方々から、今後の研究に有益なアドバイスをいただくことができ、大変勉強になった。

#### <所感>

3日にわたる学会では、多岐にわたるテーマで発表が行われた。特に印象に残った研究は、Pearce教授が行った savoring（楽しみを享受する心理学的傾向性）に関する研究である。Savoringは、ポジティブ心理学の分野で注目されている概念であるが、観光分野での実証研究はまだ少ない。そのようなことを踏まえて、観光研究における savoring を測定する尺度を作成し、日中豪印での文化差を検討した研究についての発表だった。心理学の概念や方法論を観光研究に用いる研究は、日本国内ではまだ少ないが、海外では盛んに行われているようである。そのような研究を直に聞くことができ、新たな発見を得ることができた。

また、本学会は観光学の学会であったため、心理学以外の学問領域の研究者の方々と話す機会があり、いつもとは異なった視点から自分の研究について考えることができ、多くのことを学ぶことができた。

最終日の夜には、学会が主催するテムズ川のクルーズツアーがあり、筆者を含め多くの方々が参加した。このようなツアーがあるのも、観光系の学会ならではの感覚と感じた。グリニッジから2時間ほどかけて、ロンドンの都市部に向かいゆっくりと進むクルーズの中で、他の国からきた研究者の方々とお話しする機会もあった。また、ロンドン独特の建築物やタワーブリッジ（写真2）などを眺めることもでき、大変有意義な時間を過ごすことができた。

次回の ITSA は、2018年の月に開催される予定である。



写真2 タワーブリッジ